

世界の文学

1

シェイクスピア

ハムレット

福田恆存訳

オセロー

アントニーとクレオパトラ

リチャード三世

夏の夜の夢

中央公論社

世界の文学 1

©1963

シェイクスピア

訳者 福田 恆 存

昭和38年11月12日初版発行

昭和44年3月20日24版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話 (561) 5921(代) 振替東京34

目次

ハムレット

3

オセロー

123

アントニーとクレオパトラ

235

リチャード三世

347

夏の夜の夢

461

解説

535

年譜

556

ハ
ム
レ
ツ
ト

場所

デンマーク

人物

クローディアス デンマーク王

ハムレット デンマーク王子、先王の息、現王の甥

ポロニアス 宰相

ホレイショー ハムレットの友人

レイアーティーズ ポロニアスの息

ヴォールティマンド

コーニリアス ノールウェイへの使節

ローゼンクランツ

ギルデンスターン ハムレットの嘗ての学友

オズリック 軽薄な伊達男

一従臣

牧師

マーセラス

バーナード

フランシスコ

見張りの従臣

レナルドー ポロニアスの従僕

役者数名

墓掘り二人

フォートインブラス ノールウェイ王子

ノールウェイ軍隊長

イギリス使節

ガートルード デンマーク王妃、ハムレットの母

オフィーリア ポロニアスの娘

他に宮廷の貴族、貴婦人、兵士、船乗り、

使者、従者、多数。ハムレットの父の亡霊

1

【第一幕 第一場】

エルシノア城

銃眼胸壁のうえの狭い歩廊。左右は櫓やぐらに通じる戸口。星のきらめく寒い夜。

見張りのフランシスコが矛ほこを手に往ったり来たりしている。鐘が十二時を報じる。間もなく、もう一人の見張りのバーナードが同様のいでたちで城から出てくる。闇のなかにフランシスコの足音を聞きつけ、急に立ちどまる。

バーナード 誰か？

フランシスコ なに、きさまこそ。動くな、名まえを言え。

バーナード わが君の御長命を！

フランシスコ バーナードか？

バーナード おお。

フランシスコ よく来てくれた 時間どおりだ。

バーナード いましがた十二時が鳴ったところだ。さあ、代ろう。退って休め。

フランシスコ ありがたい。なにしろひどい寒さだ。それに、気がめいてしかたがない。

バーナード なにも異常はなかったろうな？

フランシスコ 鼠一匹出なかった。

バーナード そうか、さ、休んでくれ。途中でホレイシヨとマーセラスに遭うかもしれぬ、今夜の見張りの仲間だ、急いで来るように伝えてくれ。

ホレイシヨとマーセラスがやってくる。

フランシスコ (足音を聞きつけ) あれがそうらしい。止れ、誰だ？

ホレイシヨ この国の身方。

マーセラス デンマーク王の臣下。

フランシスコ おお、あとを頼む。

マーセラス 引き受けた。お休み。代りは誰だ？

フランシスコ バーナードだ。では、頼んだぞ。(退場)

マーセラス バーナード！

バーナード おお、ホレイシヨは？ 一緒か？

ホレイシヨ (握手して) それ、その手がここに。

バーナードー よく来てくれた、ホレイシヨ。マーセラス、待っていたぞ。

ホレイシヨ ところで、例の一件だが、今夜も現れたか？

バーナードー いや、まだだ。

マーセラス ホレイシヨは問題にしておらぬのだ。目の迷いにすぎぬと言う。頭から信じようとしなさい、二度もわれわれを襲ったあの恐しい姿を。だから、今夜こそは、ぜひとも立ち会ってもらおうというわけだ。今夜も出るかもしれない。そうならば、信じてくれようし、それに、話しかけてもらえるからな。

ホレイシヨ ちょ、ちょ、出るものか。

バーナードー まあ、坐れ。もう一度きいてもらおう。

かたくなに閉じているその耳の砦を^{とろ}開いてくれ。この怪異、すでに二晩になるのだ。

ホレイシヨ では、坐るとするか。さ、バーナードー、話してくれ。

バーナードー 昨夜のことだ。北斗星の西にみえる、それ、あの星が、今もいま光っている、ちょうどおなじ場所に来たときだった。そう、こちらはマーセラスと二人きり。すると、鐘が一時を打って――

亡霊が現れる。完全な武装。手に元帥杖を持っている。

マーセラス しっ、黙って。見ろ、あれを！

バーナードー 亡くなったハムレット王そのままの姿。

マーセラス そうだ、学者に頼もう、話してみてくれ。

バーナードー まえのハムレット王にそっくりではないか、ホレイシヨ。

ホレイシヨ 生きうつしだ。身の毛もよだつ恐しさ、一体このようなことが。

バーナードー なにか言ってもらいたいらしい。

マーセラス 話してみろ、ホレイシヨ。

ホレイシヨ 何者だ、そのいかめしい出立ち、亡きデン

マーク王の出陣姿そのまま、無法にも、選りに選ってこの真夜中を？ ええい、答えろ、口をきけ。

マーセラス 怒った。

バーナードー 行つてしまいうぞ。

ホレイシヨ 待て。なにか言え、なにか。答えろ、口をきけ。（亡霊、消えうせる）

マーセラス 行つてしまった。答えたくないらしい。

バーナードー どうした？ 見ろ、ホレイシヨ、慄^{おそ}えているではないか、顔色もわるいぞ。これをなんと見る？ 妄想とは言いきれまい？



ハーテードー まえのハムレット王にてつくりにはいか、ホレイン・マ・

ホレイショー ああ、とうてい信じられぬ。だが、この目でたしかに見とけた、歴然たる事実、もう疑いの余地はない。

マーセラス ハムレット王にそっくりではないか？

ホレイショー そっくりどころか。装いもおなじ、あの思いあがつたノールウエイ王と一戦まじえたおりに著けておられた甲冑そのまゝ。それに、あの眉根をひそめた氣むずかしい表情は、氷原の闊いで橋にのつたポーランド兵を、怒りにまかせて問答無益と一蹴された当時の御姿さながら眼前に眺めるおもし。不思議なこともあればあるものだ。

マーセラス こうして、まえ二度とも、まさに時刻もおなじ真夜中、あのいかめしい出立ちで、見張りのそばを通つて行つたのだ。

ホレイショー いま格別おもしろいあたることもないが、なんとなく不吉な胸騒ぎ、国を乱すただならぬ不祥事の前ぶれかもしれないね。

マーセラス まあ、坐れ。そういうえば、ききたいことがある。いったい何事だ、この嚴重きわまる取締りは？ それも毎夜毎夜、国をあげての大騒ぎ、昼は昼で、大砲づくりに血道をあげ、外国からは武器をつぎつき大量にしこむかとおもうと、いっぽう船大工どもを駆り集め、休

みもやらずにこき使う。この夜を日についての汗水仕事、そもそもどこに、どんな差し迫つた事態があるというのだ？ 知っていたら、教えてくれぬか？

ホレイショー それなら知らぬでもない。ま、噂はこうだ。ことの起りは亡くなられたハムレット王、それ、いまでも目のあたりお姿を拝したが、かつて王にはみずから一騎打ちを挑まれたことがある。知つていよう、相手は野心満々のノールウエイ王フォーティンbras、意気軒昂たるものがあつた。が、こちらにも剛勇無雙のハムレット王、世界の隅々までその名を轟かせたお方だ。もののみごとにフォーティンbrasを打ち果された。おかげで敵は、命はもとより、おのれの領地までことごとく没収という憂きめにあう始末。騎士道の掟に照して、そういう取極めがかわされてあつたのだ。もちろん、こちら側でもそれ相当のものは覚悟していた。万一、フォーティンbrasが勝てば、それが文句なしに敵方の手に落ちたわけだが、いまも話したように、結果はハムレット王の勝ち。取極めどおり、敵の領地がこちらの有に歸したのだ。ところで、殺されたノールウエイ王には忘れ形見があつた。名もおなじフォーティンbras、血の氣の多い世間知らずの若者だが、これが胸に一物あるらしく、最近ノールウエイの辺境に出没し、ただ食いものにありつけさす

ればなんでもやろうという無鉄砲なあぶれものどもを掻きあつめ、何事か企んでゐるとのこと。決っている、こちらには見とおしだ。父親が失つた領地を、なんとしてでも腕づくでとりかえそうという魂胆としか思われぬ。どうやら、それに備えようというのが、おもな理由らしい。この見張りはもちろん、國中、上を下への大騒ぎも、つまりはそれと察せられるのだが。

バーナードー それしかあるまい、まさにそれだ。見張りのそばを武装して通りすぎた不吉なかげ、なにしろ打ちつづく争いの因になつてきた王のことだ、事なくすめばいいが。

ホレイシヨー 針のさきほどのごみでも、眼に入れば煩わしい。大昔の話だ、シーザー暗殺のまえには、さしも榮華を誇つたローマにも、いろいろな凶兆が現れたらしい。墓はことごとく鵲を聞き、その亡骸を吐き出だす。経帷子をまとつた死人の群が、気味のわるい叫声をあげ、不可解な言葉を撒きちらしながら、ローマの辻々をうろつきまわつたという。現に、おなじような異変の前じらせが、このところ次から次へと。そうではないか、星は焰の尾をひき、血の露をふらし、日の光は力を失ひ、大海を支配する月もこの世の終りかとばかり病み蝕まれる。天地が示し合せて、なにか不祥事の待ち伏せを、この

国のひとたちに告げ知らせようとしている。どうしてもそうとしか。(亡霊ふたたび現れる) しつ、見ろ、あそこへまた！ よし、止めてみよう、祟らば祟れた。(両手を拡げて立ちふさがる) 待て！ 声があるなら、ものを言え。なにが言いたいのだ？ それを言え、きさまも浮ばれようし、こちらのためにもなろう。さあ、言ってくれ。わかつていけば避けられるこの国の禍いを、知つてゐるなら、頼む、言ってくれ！ それとも、生前、地中に埋めかくした不浄の財に心が残り、よくある話だ、それはいまだに浮ばれず、(鶏が鳴く) さ、打ち明けてくれ——待て——言ってくれ——止める、マーセラス！

マーセラス 打つてみようか？

ホレイシヨー おお、やむをえぬ、止らなければ。

バーナードー こつちだ！

ホレイシヨー こつちへ来たぞ！

マーセラス 消えてしまった！ (亡霊、消える) まずいことをしたな。かりにも王者の形をそなえたものだ。手荒なまねは慎むべきだった。まるで空を切るようなもの、相手は不死身、打つてみたところでしょうがない、力みかえつても、所詮むだだ。

バーナードー 何か言いそうにしたと思つたら鶏のやつが。

ホレイシヨ― うむ、はつとしたらしい。恐しい呼びだしを受けた罪びとのようだった。鶏は夜明けを告げるめたい鳥といわれる。のども裂けよとばかり天空にひびかせるあの力強い雄叫びが、日の神を揺り起すとか。その瞬間、処をえずにさまよう天地の精も、あわてふためき、おのれの巢にもどるときいたが、まさにそのとおりだった。

マーセラス そうだ、あの鶏の声で消えた。なんでもクリストの降誕を祝うころになると、その暁を知らせる歌声が夜どおし聞え、精霊も恐れてさまよい歩かぬという話だ。夜も安全、星の力もとどかず、妖精に憑かれる心配もなし、魔女も通力を失い、淨福の気があたりに満ち溢れるというが。

ホレイシヨ― 聞いたことがある。まんざら、でたらめとも言いきれまい。おお、あの空、朝日が、茜色の被衣をひろげ、露を踏みしめながら、東の尾根を越えてくる。見張りの役も、これで打ち切りとするか。ところで、今夜のことだが、一部始終、王子ハムレットにお伝えしたほうがいいとおもう。亡霊はとうとう口をきかなかつたが、ハムレット様になら、きつと何か言うにちがいない。どうしてもお知らせしようではないか。それが友情でもあり、義務でもあるというもの。どう思う？

マーセラス ぜひ、そうしよう。さいわい、けさお目にかかれる場所を知っている。

2

〔第一幕第二場〕

城内、会議の間

トランベットの吹奏。デンマーク王クローディアス、その妃ガートルード、重臣たち、それからポロニアスとその息子レイアーティーズ、つづいてヴォールティマンド、コーニリアスははいってくる。いずれも盛装、戴冠式から退いてきた様子。最後に、黒の喪服を着た王子ハムレット、伏目がちに登場。王と妃とは玉座にのぼる。

王 おもえば、兄ハムレット王、死して、いまだその記憶はなまなましい。何人も心を悲しみにゆだね、國中、暗い額に喪を分ちあうのが人情であろう。が、それに負けてはならぬ、そう思うたればこそ、王の死を深く歎きながらも、節度を持して、おのれの本分を忘れまいと努めてきたのだ。したがって、かつての姉、いまは妃、この国の主権をとんでも担うガートルードだが、それをあえて妻にしたのも、心中、いわば傷ついた喜びを背負う

おもしろいであつた。片眼は喜びに輝き、片眼は愁いに沈み、祝福と哀悼とをひとしく秤にかけ、葬儀には歡喜の調べを奏し、結婚の式には挽歌をうたう、そのような氣もちであつた。もちろん、一同のよき忠言を御けたおぼえない。この婚儀に関するかぎり、みな早く同意してくれはらず——礼を言う。つぎに、知つていようが、例の若輩者フォートインブラスの件だ。こちらの実力を侮つてか、それとも兄の不幸のため国内千々に乱れたりと推し測つてか、分はおのれにありと夢のような空だのみ。ぬかりなく使者をよこし、かつてその父親が約束どおり兄に明け渡した旧領地を、ふたたび還せとうるさくせつついている。それはそれとして、肝腎なのはこちらの出ようだ。きよう集つてもらつたのもそのためだが、ここにノールウエイ王あてに認めておいた一書がある。王はフォートインブラスの叔父にあたるもの、最近、老病でずっと寝たきりとか、したがって、甥のもくろみについてもよく知らぬらしい。しかもフォートインブラスは王の領民をそそのかし、かれらを掻き集めて大軍を組織しようとしている。王にはそれがおさえられるはず。その依頼の手紙だが、これをノールウエイ王に送る使者として、コーニリアス、それからヴォールティマンド、おまゑたち二人を任命する。先方との折衝すべてこの親書に認

めおいた条項のとおり、それ以上の計いは固く禁じておく。では、すぐにも。

コーニリアス

ヴォールティマンド

かしこまりました、万事、仰せのとおりに。

王 頼んだぞ。では、氣をつけて行くがよい。(コーニリアスとヴォールティマンド、敬礼して退場) おお、レイアーティーズ、なんであつたかな? なにか願ひごとがあると言つていたが? 筋さえとおつたことなら、デンマーク王はかならずかなえてやるぞ。レイアーティーズ、なにがほしい? こちらから頼んでもしてもらいたいことではないのかな? このデンマーク王室とお前の父親とのあいだには、切つても切れぬ縁があるのだ。頭と心臓との関係よりも、さらに深く、手もこれほど快く口の用をたしはしまい。

レイアーティーズ 申しあげます。フランスへもどらせていただきます。もちろん、この戴冠式参列のためにと、喜んで帰国はいたしました。が、いまその務めをはたしおえてみますと、想いはふたたびフランスへと駆られます。身勝手なお願ひ、どうぞお許しくださいますよう。

王 父親の許しは得たのか? どう言っている、ポロー

ニアスは？

ポロニアス　それが、うるそうて、うるそうて、渋る父親の心も察せず、むりやりせがまれました、その強情にはとうとう折れてしまうたのでござります。このうえは、父親からお願ひ申しあげます。なにとぞ、おいとまをおやりくださいますよう。

王　気ままに遊んでこい、レイアーティーズ。来る春はお前のもの、その気性だ、むだにはしまい……ところで、ハムレット、甥でもあるが、いまはわが子。

ハムレット　（横を向いて）ただの親戚でもないが、肉親あつかいはまっぴらだ。

王　どうしたというのだ、その額の雲、いつになつても、はれようとせぬが？

ハムレット　そのようなことはございますまい。廂ひましを取られて、恵み深い日光の押売にいささか賄易へまよしておりますくらい。

妃　ハムレット、その暗い喪服もくふくを脱ぎすて、デンマーク王に親愛の眼まなこなざしを、なぜさしむけてはくれぬ。そうして伏目に、いつまで地下の父上を慕い求めているやうというのか。生あるものはかならず死ぬ、そしてあの世で永遠の命を授るさづか、わかりきったことではないか。

ハムレット　さよう、わかりきったことでもございまいしう。

う。

妃　それなら、なぜお前にだけ常ならぬことに見えるのか？

ハムレット　見える！ いや、事実そうなのだ。見えるとか見えぬとか、そのようなことはこちらの知ったことではない。この漆うるしのように黒い上衣、しきたりどおりのものともらしい喪服、そらぞらしい溜息、溢あふれほとばしる涙の泉、しめつばい憂え顔、そのほかありとあらゆる悲しみの型も表情も、母上、この心の底を真実あらわしてはおきませぬ。なるほど、こういうものなら目にも見える。そうしたお祭り騒ぎなら、誰にもやれましょう。この胸のうちにあるものは、そのような、悲哀が著て見えるよそゆきの見てくれとは、ちがいます。

王　そのやさしい心根は、父を失ったものとして、まことに望ましいものにはちがいない。だが、ハムレット、父上もまたその父の死にめにあい、その父も父を失うているのだ。こうして生き残ったものは、順ぐりに、喪に服して、父を愛惜し、子たるものの務めをはたしてきた。しかし、かたくなに悲しみの殻に閉じこもるのも、神を信ぜぬ傲慢なふるまい。また、男らしい態度ともいいかねる。天にたいしては不遜ふそんのきわみ、信仰うすき心の持主、わがままだ、わからずやだ、といわれても、しかた



妃 ウィッテンバーグへ行くのはやめにして、どうかここに。

はあるまい。そうであろう、これが世の常、避けがたいことと悟りながら、なおもむきになって気むずかしい反抗をつづけることがあろうか？ 愚かしいぞ。天に背き、死者に背き、自然に背く。いや、なにより理性そのものに背く罪というもの。そうではないか、理性は、代々の父の死を現世の常法と観じ、人間が最初に死を見たときから今日まで、「これだけはどうにも避けられぬこと」と呟いてきたのだ……頼む、ハムレット。その益なき悲しみを、おもいきって大地に投げ棄て、この王を實の父親とおもうてはくれぬか。そうだ、この機に広く中外に知らせよう。ハムレットこそは、やがてこのデンマークの王位を継ぐべきもの。実の親に劣らぬこの深い情愛も、なんの不思議もないわけだが、それだけに、例の申出で、それ、どうしてもウィッテンバーグの大学にふたたびもどりたいという、それを言いだされるのが一番つらい。出来れば、ここにどまり、わが重臣として、身内として、息子として、力にもなり、慰めともなってもらいたいのだが。

妃 ハムレット、母の願いも無にしないでおくれ。ウィッテンバーグへ行くのはやめにして、どうかここに。
ハムレット できるだけそうしたいものと思っております。

王 おお、そのやさしい返答。うれしいぞ。デンマークにとどまって、わが身同様、気ままにふるまうがよい。さあ、ガートルード。ハムレットのすなおな承諾、いまの一言で心もなごむ思い。心おきなく酒宴に臨むとしよう。いまからデンマーク王が捧げる杯ひとつひとつに祝砲を打ちあげ、雲のうえに喜びを伝えてくれ。天も王の酒宴に和し、地上の歓呼にこたえるであらう。さあ、奥へ。(トランベットの吹奏。ハムレットだけ残り、一同退場)ハムレット ああ、この穢^{けが}らわしい体、どろどろに溶けて露になってしまえばいいのに。せめて、自殺を大罪とする神の掟^{おきて}さえなければ。ああ、どうしたらいいのだ、この世の営み^{かまひ}いつさいが、つくづく厭^{いと}になつた。わずらわしい、味気ない、すべてかいなしだ！ ええい、どうともなれ。庭は荒れ放題、はびこる雑草が実を結び、あたり一面、むかつくような悪臭。このようなことになるうとは。たった二月、いや、まだ、二月にもならぬ。立派な国王だった。その父にくらべれば、あいつは雪と墨とのちがひ。父はどんなに母上を想うておられたことか。外の風にもあてまいと、それほどまでに母上を———なんということだ、そのようなことまで憶^{おも}いださねばならぬのか？ そう、そのころは、父上の胸もとから溢^{あふ}れ出る情愛の泉を、一滴あまさず飲みほそうと、その項にすが

りついて離れようとしたなかった母上。しかも、年とともに深まる想いに身をひたしておられた母上。それが、たった一月。言ってみてもはじまらぬ……たわいのない、それが女というものか！ 一月もたたぬうちに。ニオベもかくやと思われるほど、あのように泣きぬれて、棺に寄りそい、墓場までおあとを追うて行つた、あのとときの靴の踵^{かかと}もまだそのまま、跳ねのあともなまなましいうのに。母上、それを、母上は———ああ、事理をわきまえぬ畜生さえ、主人が死ねば、もすこし歎^{なげ}き悲しむであらうに———あの叔父の胸に身をゆだねるとは。おなじ兄弟とはいふものの、似ても似つかぬあのような男と。それも、たった一月。空涙で泣きはらした赤い目もとも、まだそのまま。おお、なんたる早業^{はやわざ}、これがどうして許せるものか……いそいそと不義の床に駆けつける、そのあさましさ！ よくないぞ、このままではすむまいぞ、いや、待った、こればかりは口が裂けても、黙つておらねばならぬ。

ホレイシヨ、マーセラス、バーナードーの三人が登場。

ホレイシヨ お元気でなによりとぞんじます。
ハムレット ありがとう。ホレイシヨーではないか———まさか、ここで！